
冷たい海

市松ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷たい海

【Nコード】

N4346D

【作者名】

市松ユウ

【あらすじ】

星ひとつ無い真っ暗な空。真夜中に月だけがそれを見ていた。

嬉しい。

また貴方と一緒にこうやって居ることが出来て、
私は天にも昇れそうな気分よ。

真夜中に急に電話してきて「ドライブへ行こう。迎えに行く。」なんて言うものだから、
慌ててお気に入りの黒いワンピースに着替えたわ。
何日も貴方から連絡が無かったからわたしはとても幸せだった。

インターホンが鳴り響き、ドアを開けた瞬間、
貴方はニツコリ微笑んで私の首に手をかけて
「愛してるよ。」と優しくささやいた。

貴方の黒塗りのスポーツカーで海辺へドライブ、
二人の思い出の海だった。

ねえ覚えてる？ここで貴方は私のこと「好きだ。」って言ってくれた。
なのに、なんでこんなことになっちゃったのかな。
貴方がこうして私を再び誘ってくれた今、そんなことはどうでもいいよね？

この車の助手席は私のもの。
なのに私は真つ暗なトランクの中。
それでも、貴方が好きよ。

「さあ、着いたよ。」

そう言つて貴方はトランクを開けて何十にもビニールで包まれた私を担いだ。

懐かしい潮の香り。

人気の無い真夜中の真つ暗な海。

波の誘うような音だけが聞こえる。

貴方がいなくなりそうでちよつとだけ怖かった。

星ひとつ無い真つ暗な空。

月明かりが貴方のその愛しいお顔を照らした。

笑っている。

そんな貴方をみて私も何故か嬉しくなった。

貴方の腕の感覚が消えた途端、私は海の中に落下した。

冷たく、薄暗い。

闇にも似た視界。

静かでそのまま溶けてしまいそうだった。

嬉しい。

私は天にも昇れそうな気分よ。

今も冷たい海の底で
貴方だけを愛してるわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4346d/>

冷たい海

2011年1月26日23時12分発行